

# 特別支援学校（知的障害者）における就労支援に関する研究（3） —就労継続力の指導・支援に関する PAC 分析—

今 林 俊 一\*・榎 慶太郎\*\*

（2017 年 10 月 24 日 受理）

## A Study of Employment Support at Special-Needs School （for Children with Intellectual Disabilities）（3） —PAC Analysis of Instruction and Support of Continuous Employment Force—

IMABAYASHI Shunichi・SAKAKI Keitaro

### 要約

本研究では、特別支援学校（知的障害者）において就労継続力の育成に資する指導・支援の観点を明らかにすることを目的とし、PAC 分析を用いて複数の教師を対象に、そのイメージ構造の分析を行った。対象事例は、被験者が、今までに、関わった一般就労を目指す、または目指していた生徒のうち、一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援を行った中で、最もうまくいかなかったケース（以下、失敗事例）と最もうまくいったケース（以下、成功事例）を対象とした。その結果、失敗事例と成功事例では、イメージ構造に共通する部分と異なる部分があることと教職歴が長くなるにつれて指導・支援の観点は、考慮する対象や範囲の視点が拡がり、深まりを示すことが明らかにされた。

**キーワード：**特別支援学校、キャリア発達支援、PAC 分析、成功事例、失敗事例

---

\* 鹿児島大学教育学系 教授

\*\* 鹿児島大学大学院教育学研究科 大学院生

## 問題と目的

特別支援教育の理念は、「自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する」ことであり、子どもたちの自立と社会参加の形の一つとして「就労」がある。特別支援学校高等部を卒業した生徒の進路先としては、大部分が一般就労か福祉的就労かに分けられる。知的障害者の場合、特別支援学校高等部を卒業してすぐに就職する生徒は、全国平均では約32.1%（文部科学省、2017）で、近年緩やかな上昇傾向にある一方、就職している知的障害者の平均勤続年数は7年9か月（厚生労働省、2014）となっている。村野（2016）は、「企業就労率だけの向上に着目するだけでなく、就労後の定着が大きな課題である」と指摘しており、特別支援学校の進路支援としては、一般就労したり、就労を継続したりするときに必要となる力（以下、就労継続力）の育成が求められている。

障害者が一般就労を目指し、就労を継続するために必要な力については、障害者雇用に関係する機関から多くの観点が示されている。例えば、田所（2016）は、企業実習報告会での特例子会社社長からいただいた言葉として、『「学生のうちに挨拶や基本的な生活習慣を身につけておくとよい」。また、会社の選考基準のようなものとして、働くことの意義、意味を理解していること。働く喜びをもっているかどうか。元気に働ける体力。自力通勤ができること。上司からの指示が理解できること。職場の同僚に迷惑をかけないで一緒に働けること。』と報告している。上岡（2013）は、「障害者雇用を促進するためには、障害者の働く意欲を高める必要があること、働く意欲を高めるには、生活意欲を高める必要があること、生活意欲を高めるためには、基本行動を確立する必要があること」と述べている。向後（2014）は、就労準備性の課題として、「どのような仕事に向いているのか」という職業適性の問題や「どのような仕事に就きたいのか」という本人の思いに教師の意識が向きがちだが、働くためには、生活のリズムが整っていることや基本的な対人スキルが獲得されていることなど、職種を問わず必要とされるスキルがあることを挙げている。

特別支援学校では、教師一人一人が、これらの関係機関からの知見やキャリア教育の実践の取組の一つである「産業現場等における実習」を通じた反省等を基に、教師間で共通理解して指導・支援に生かしている。しかし、就労に向けた指導・支援の観点は、おおむね同じ方向性であっても教師一人一人の具体的な指導・支援を考えると時の内容や程度、指導・支援を通して成長した生徒の姿などからなるイメージ構造の全てが一致しているとは言い難い。また、同じ教師でも、就労継続力の育成についての指導・支援がうまくいったときと、うまくいかなかったときのイメージ構造が一致しているとは限らない。そこで、就労継続力を指導・支援するときの教師一人一人のイメージ構造を分析し、就労継続力についての共通性と差異性を明らかにしたり、同じ教師でも指導・支援がうまくいったときと、うまくいかなかったときの共通性と差異性を明らかにしたりすることは、学校という組織の中で児童生徒に対する指導・支援の共通理解をするときに有益なことであろう。

イメージ構造を分析する方法には、SD法やR技法、Q技法などが用いられるが、個人ごと

に態度やイメージ構造を検討できる技法として、内藤 (2002) によって開発された PAC 分析がある。これは、当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人別に態度構造 (Personal Attitude Construct ; PAC) を分析する方法である。これらのことから、PAC 分析は、教師一人一人の指導・支援に対するイメージ構造を明らかにし、同一個人内と個人間を比較・分析するのに妥当なものであると思われる。

そこで、本研究では、特別支援学校 (知的障害者) における就労継続力の指導・支援の育成についての観点を明らかにすることを目的とし、PAC 分析で複数の教師を対象に、そのイメージ構造の分析を行う。

## 方法

### 1. 被験者

被験者はいずれも、実験者と面識のある特別支援学校教諭で、研究の趣旨と実験者以外への匿名性が保証されていることを説明され協力に応じた特別支援学校での教職歴が 10 年未満 1 人、10 年以上 20 年未満 1 人 (特別支援学校高等部進路指導主任経験者)、20 年以上 1 人 (特別支援学校高等部進路指導主任経験者) の計 3 人である。

### 2. 対象事例

被験者が、今までに関わった一般就労を目指す、または目指していた生徒のうち、一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援を行った中で、最もうまくいかなかったケース (以下、失敗事例) と最もうまくいったケース (以下、成功事例) を対象とした。

### 3. 実施期日及び手続き

2017 年 7 月中旬から下旬にかけて実施した。実験を始めるとき実験者と被験者との間で三つの確認をした。一つ目は、被験者からの申し出によって、いつでも実験を中止したり、回答を拒否したりすることは可能であることを伝えた。二つ目は、被験者がクラスターの解釈をする面接場面での録音の許可をとった。三つめは、研究結果について、名前等は被験者 A、被験者 B などとし、論文等にまとめて公開することの承諾をとった。

#### (失敗事例について)

**テーマに関する自由連想** 連想刺激としては、以下のように印刷された文章を提示するとともに、口頭で読み上げて教示した。

「知的障害のある特別支援学校の生徒に対する、一般就労に向けた指導・支援についての質問をします。今までに、関わった一般就労を目指す、または目指していた生徒のうち、一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援を行って、最もうまくいかなかったケースを思い出してください。次に、その生徒の指導・支援に関連する内容を思い浮かべ、思い浮かんだ内容のイメージや言葉を思い浮かんだ順にカードに記入してください。」

続いて、縦 5.5cm、横 9.1cm の名刺サイズの大きさのカードを 50 枚被験者の前に置き、頭に

浮かばなくなるまで自由連想させ、思い浮かんだ順にカードに記入させた。

**重要順位の測定** この後、今度は、言葉の意味やイメージがプラスであるかマイナスであるかには関係なく、被験者にとって重要と感じられる順にカードを並べ換えさせた。次に、以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて、全ての連想項目間の類似度を評定させ、類似度距離行列を作成した。

**連想項目間の類似度評定** 教示は、下記の〈教示と評定尺度〉が印刷された用紙を被験者に提示したまま、「 」の部分の部分を口頭で読み上げることでなされた。

「あなたが、一般就労を目指す、または目指していた生徒のうち、一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援で、最もうまくいかなかったケースに関連するものとしてあげたイメージや言葉の組み合わせが、言葉の意味ではなく、直観的なイメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を下記の尺度の該当する数字で教えてください。」

- 非常に近い・・・・・・・・・・ 1
- かなり近い・・・・・・・・・・ 2
- いくぶんか近い・・・・・・・・ 3
- どちらともいえない・・・・ 4
- いくぶんか遠い・・・・・・・・ 5
- かなり遠い・・・・・・・・・・ 6
- 非常に遠い・・・・・・・・・・ 7

#### (成功事例について)

次に、今までに、関わった一般就労を目指す、または目指していた生徒のうち、一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援を行って、最もうまくいったケースを思い出させた。以降の手続きは、「うまくいかなかった」の部分が「うまくいった」へと変更されただけである。

**クラスター分析及び被験者による解釈の方法** 上記の類似度評定で作成された類似度距離行列に基づき、被験者ごとに失敗事例と成功事例のそれぞれにウォード法でクラスター分析を行った。次に、析出されたデンドログラムをコピーして1部は被験者に提示し、もう1部は実験者が見ながら、失敗事例、次に成功事例の順番に、以下の手順で被験者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。

まず、被験者にデンドログラムの図を提示し、被験者自身でクラスターを決定してもらうために、デンドログラムの上から紙を重ねて見えなくし、被験者が同じような言葉（イメージ）でまとまっていて、妥当と思われる解釈が得られる切断距離の位置を決定してもらった(Figure 1 から Figure 6 参照)。群ごとの項目全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として考えられるものについて質問した。これを繰り返して全ての群が終了した後、第1群と第2群、第1群と第3群、第2群と第3群というように、クラスター間を比較さ

せてイメージや解釈の異同を報告させた。この後さらに、全体についてのイメージや解釈について質問した。続いて、実験者として解釈しにくい個々の項目を取り上げて、個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。最後に、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを回答させた(Figure 1からFigure 6の連想項目の前に付加された( )内の符号を参照)。

## 結果と考察

被験者ごとに、失敗事例と成功事例を個別に取り上げて考察する。以下の(Q: )は、実験者による質問部分である。

### 1. 被験者Aの事例

被験者Aは、経験のある学校種は特別支援学校のみで、教職歴10年未満の女性教諭である。失敗事例は、被験者Aが7年目に担任した高等部3年の軽度の知的障害のある男子生徒であり、一般就労を目指していたが、高等部卒業時点では障害福祉サービス事業の就労移行支援を利用することになった。他方、成功事例は、被験者Aが3年目で担任した高等部1年の中度の知的障害のある女子生徒で、被験者Aは生徒が高等部を卒業するまで関わっており、高等部卒業時に一般就労をしている。

#### (1) 失敗事例

失敗事例で連想されたのは13項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 1のようになった。

連想項目の単独イメージは、マイナスイメージが11項目で、プラスイメージとどちらともいえないゼロの項目は、それぞれ1項目であった。このことから、全体としてのイメージは、13項目中11項目がマイナスイメージであることから、マイナスイメージであるといえる。

重要順位の高い順にはほぼ1/2までの6項目を挙げると、①自分の状態とうまく向き合えない生徒、②どのような進路があるのかを知らない、③進路選択の提示の少なさ、④働くことへの意識付けが普段からできなかった、⑤実習での達成感を感じることができていない、⑥個別に話をする、である。1位から5位の項目全てがマイナスイメージで、6位の項目のみがプラスイメージであった。

クラスターとしての重要度は、1位から6位の項目全てがクラスター1であることから、クラスター1が最も重要なクラスターであるといえる。次は、重要順位7位と8位が含まれるクラスター3、重要順位9位と10位の項目からなるクラスター2、重要順位13のクラスター4の順といえよう。

#### <被験者Aによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈: 抜粋>

クラスター1は「どのような進路があるのかを知らない」～「個別に話をする」の7項目: 生徒と担任の関係です。生徒と担任との関わり…。授業の…、何て言っているかなあ、教師が生徒への指導、指導内容。

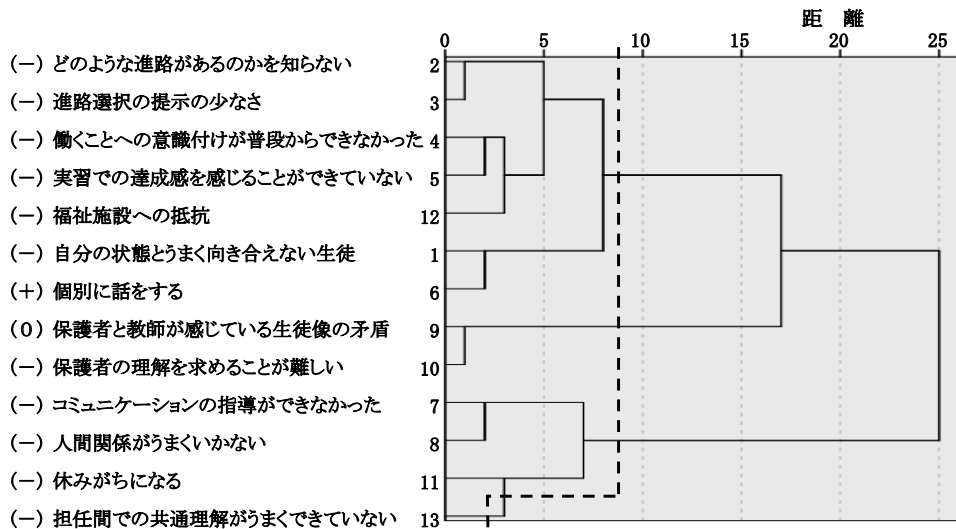


Figure 1 失敗事例のデンドログラム (被験者A)

注1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注2) 図中の縦断破線は、被験者Aによるクラスター切断距離の位置

注3) 各連想項目の前の( )内の符号は単独でのイメージ

クラスター2は「保護者と教師が感じている生徒像との矛盾」「保護者の理解を求めることが難しい」の2項目：教師と保護者間の連携。教師と保護者の連携がうまくいっていなかったということ。(Q：他はないですか?) 教師の外への発信。

クラスター3は「コミュニケーションの指導ができなかった」～「休みがちになる」の3項目：生徒の自己理解。自己理解ができていないことに本人は困っていたけど、自分をうまくコントロールできていなかった。受け入れられない、認められない…、とにかくコントロールできないという感じ。

クラスター4は「担任間での共通理解がうまくできていない」の1項目：教師の、教師同士の意志疎通、何だろう…う～ん、教師の問題。

クラスター1とクラスター2の比較：教師から働き掛けるというところは似ているけれど、働き掛ける相手は違う。(Q：働き掛ける相手が違う、1は生徒で2は保護者ということですか?) はい。(Q：他はないですか?) 伝える、働き掛ける内容は似ているというか同じだけど、伝え方とかはちょっと違う。伝える方法は違う。1は授業などの指導場面、2は指導場面・授業ではないとき、意図的に場面設定をしないとイケない。

クラスター1とクラスター3の比較：指導の目的は同じ。就職するのに必要な力を高める、社会に出たときに必要な力をつけるという点では同じ。違うところは、クラスター3は自分の内面について、クラスター1は自分の外に興味・関心を向けることで違う。

クラスター1とクラスター4の比較:話をし合おうというところは似ているけど、相手は違う。

クラスター2とクラスター3の比較:生徒の事について知っていくことは同じだけれども、3は自分自身のことで、2は他人への理解、理解する対象が違う。自分自身か他人かみたいな…。

クラスター2とクラスター4の比較:大人同士で会話をすると同じ。大人と大人の会話というか、話をすると似ているけれど、立場が違う。(Q:立場が違うとは?)保護者と教師の立場だったり、もっている知識だったりが違う。(Q:もっている知識とは?)教育に関する知識。

クラスター3とクラスター4の比較:どちらもコミュニケーションを取るところは似ている。同じような話をしているのは分かる。話し合ったりとか、そういうところは似ているかな。違うところは、3は相手が生徒で授業の中で指導していく、4は相手が教師で授業ではなくて、授業ではない場面での関わりとかですかね。

全体について:人間関係というか、そういうところ、自分を知ったりとか、自分の周りについて知る、色々なことについて知るということが、全体を通して共通しているというか、似ているような気がします。あとは、え〜と、教師の、教師側の…、生徒が色々なことを知るといってもですけど、教師も知っておくみたいな、教師も知識とかを、教師の知識が大事みたいな…。全部教師が、知識がないとできないような、何というか…。

補足質問:「個別に話をする」→(Q:個別に話をするというのは、どういうことですか?)  
個別に話をすることが多かったということ。

#### <失敗事例についての総合的解釈>

クラスター1:このクラスターは、教師の学校での教育活動を通して、生徒に働き掛ける、指導・支援する内容で構成されている。指導・支援する内容というのは、就職する・働くことに直接つながるものであり、生徒の進路に関する知識不足や働くことへの準備が十分にできていないことと、それに対する教師の指導・支援についての難しさがうかがえる。個別に話をする機会が多くなるなど努力はしていたが、進路選択を十分に提示することができなかつたり、実習で達成感を感じることや働くことへの意識付けが難しかったりしたことによる、学校での学習活動を通して、自分の高等部卒業後の生活や働くイメージがもてなかったことから、このクラスターは<働くことへの理解と働くイメージ>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター2:このクラスターは、「保護者と教師が感じている生徒像の矛盾」「保護者の理解を求めることが難しい」から構成されており、生徒の実態把握や理解が保護者と教師とで異なり、保護者の理解を求めることが難しいなど、教師と保護者の連携の難しさがうかがえる。そこで、このクラスターは<生徒理解と家庭との連携>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター3:このクラスターは、生徒のコミュニケーション力が低く人間関係がうまくい

かない。そして、休みがちになる。つまり、自分の気持ちや状態を理解して、受け入れて、行動を調整・コントロールすることが難しかった結果、人間関係の形成に課題があったことがうかがえる。人間関係の形成のための指導・支援がうまくいくためには、生徒自身が自分を理解し、行動を調整することができることが重要となる。そこで、このクラスターは「自己理解と人間関係の形成」のクラスターと名付けることができよう。

クラスター4:このクラスターは「担任間での共通理解がうまくできていない」の1項目で、教師同士の意志疎通ができておらず、教師の同僚性に関わる問題の内容である。そこで、このクラスターは「同僚性」のクラスターと名付けることができよう。

全体として:全体イメージの報告では、「知る」という言葉がキーワードになっている。知る内容については、自分自身だったり、自分の周りだったり、様々なことが知る対象になっていると思われる。また、誰が知るのかというと、生徒はもちろん教師も対象となっている。「知る」という言葉は被験者Aの報告から「学ぶ」という意味も含んでいることがうかがえる。一般就労するためには、生徒自身が、働くことの意味と働くイメージの獲得が必要であり、教師は適切な指導・支援をするために正確な生徒理解が必要である。また、生徒に進路情報を提供したり、働くことの意味を伝えたりすることで、働くことの意味と働くイメージの獲得ができるようにしたり、自己理解を通して人間関係のより良い形成につなげていくように働きかけたりすることが必要である。家庭との連携も必要で、保護者に情報を伝える知識や技術も求められる。これらのことを支えるものは、教師の教育に対する専門性であり、全体として「知る・学ぶ」ということにつながっていると見えよう。そして教師の専門性を支えるものとして同僚性が求められていると見えよう。

## (2) 成功事例

成功事例で連想されたのは11項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 2のようになった。

連想項目の単独イメージは、全ての項目がプラスイメージであった。このことから、全体としてのイメージは、プラスイメージである。

重要順位の高い順にはほぼ1/3までの4項目を挙げると、①立ち直り、切りかえを早くする、②相談する練習、③素直に指示を聞くことができる、④コミュニケーション、であり、これらは社会性発達に関係するレジリエンスやソーシャルスキルの内容である。

クラスターとしての重要度は、重要順位の1位から4位までが、クラスター1に属していることから、クラスター2よりもクラスター1の方が、重要度が高いといえる。

### ＜被験者Aによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈：抜粋＞

クラスター1は「立ち直り、切りかえを早くする」～「笑顔」の8項目:人間関係について。あとは、学校でできる支援。授業の中でできる、支援ができる内容だったり、え～と、後は、生徒の内面について…。自分自身を知るといような。

クラスター2は「進路先への興味・関心」～「保護者との連携が密」の3項目:外への興味・



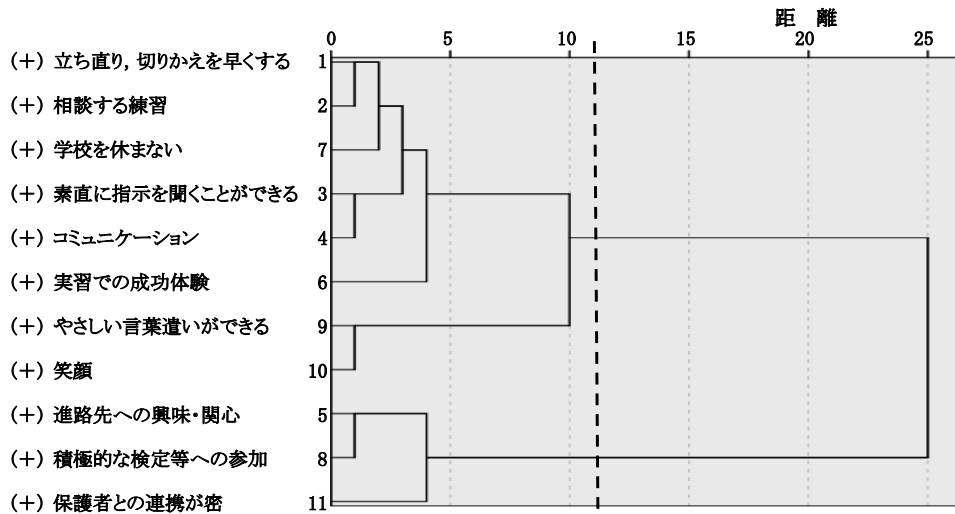


Figure 2 成功事例のデンドログラム(被験者A)

注1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注2) 図中の縦断破線は、被験者Aによるクラスター切断距離の位置

注3) 各連想項目の前の( )内の符号は単独でのイメージ

関心だったりとか、技術！技術を身に付けるとか…、そういうところ。外への発信というところ。

クラスター1とクラスター2の比較:似ているところは、どちらも知る,学んでいく。違いは、1は自分の内面を学んでいく,2は外のことについての進路先とか、検定とかも実習につながっていくような技術を身に付ける、内面とそれ以外の外のイメージです。生徒だけではなくて、教師が外に発信するというのも含まれている。

全体について:まとめて知っていく,学んでいくというイメージ。生徒が学んでいくことだったり、教師が指導をするために学ぶことだったり。教師と生徒との関わり。

補足質問:(Q:保護者との連携が密というのは教師側から?) こういうところも、教師が色々情報提供をするというか、まとめると、似ているところは1も2もどちらも学んでいくところである。1は内面で、2は外への発信というのが違う。

### <成功事例についての総合的解釈>

クラスター1:このクラスターは、生徒の学校生活の中での様子や行動観察から得られるイメージや情報で構成されており、学校内での指導・支援が可能なことである。気持ちの切り替えや立ち直りが早かったり、素直に指示を聞くことができたりすること、また、コミュニケーションが取れ笑顔で優しい言葉遣いができることは、被験者Aの報告でも人間関係というイメージが示すとおり、人間関係を形成し保つために必要な力である。そこで、このクラスターは<人間関係の形成と学校での支援>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター2：このクラスターは、進路先への興味・関心が強く、将来に向けて積極的に検定等に参加するなど、高等部卒業後の働く生活のイメージができていることを表しているといえる。また、保護者との連携が密にとれていたことから、生徒へのサポートが効果的に作用していたことがうかがえる。そこで、このクラスターは「働くことのイメージと家庭との連携」のクラスターと名付けることができよう。

全体として：クラスター1と2の比較や全体のイメージの報告から、就労し継続するための力の育成には、知る・学ぶということでもとめることができる。学んでいくのは、生徒と教師であり、生徒は良好な人間関係を形成し保持するために自分自身の内面を学び磨いたり、職業に結びつくようなスキルを身に付けるために学んだりする必要がある。教師は、それらを生徒に指導・支援するための情報提供する方策について学ぶことが必要であるといえる。

### (3) 被験者Aについての考察

失敗事例は、連想項目が生徒自身に関するものだけでなく、学校（教師）や家庭に関するものがあるのに対して、成功事例は主に生徒自身に関するものである。失敗事例と成功事例に共通するクラスターの内容としては、「働くイメージ」「人間関係の形成」「家庭との連携」が挙げられる。これらのことから、被験者Aの失敗事例と成功事例を併せて考察すると、生徒が一般就労し、それを継続するために必要な力を育成するためには、生徒も教師も主体的に「知る・学ぶ・学び続ける」ということでまとめることができよう。

## 2. 被験者Bの事例

被験者Bは、養護学校（現、特別支援学校）採用で、主に特別支援学校高等部で勤務している男性教諭である。教職歴は10年から20年未満で、特別支援学校高等部進路指導主任の経験がある。失敗事例は、被験者Bが4年目に担任した高等部3年の軽度の知的障害のある男子生徒であり、一般就労したが1年未満で退職している。成功事例は、被験者Bが17年目に関わった高等部3年の軽度の知的障害のある男子生徒であり、一般就労して1年目である。

### (1) 失敗事例

失敗事例で連想されたのは10項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 3のようになった。

連想項目の単独イメージは、10項目中7項目がマイナスイメージで、3項目がどちらともいえないゼロであった。このことから、全体としてのイメージは、マイナスイメージであるといえる。

重要順位の高い順に1/2までの5項目を挙げると、①コミュニケーションが苦手（挨拶）、②生活習慣が不規則（起きられない）、③働く意識を高められなかった（在学中）、④周囲のサポートが少ない（関係機関）、⑤保護者の協力がいない、である。1位から5位の項目全てがマイナスイメージであった。

クラスターとしての重要度は、1位から3位、4位から6位はそれぞれ同じクラスターに属

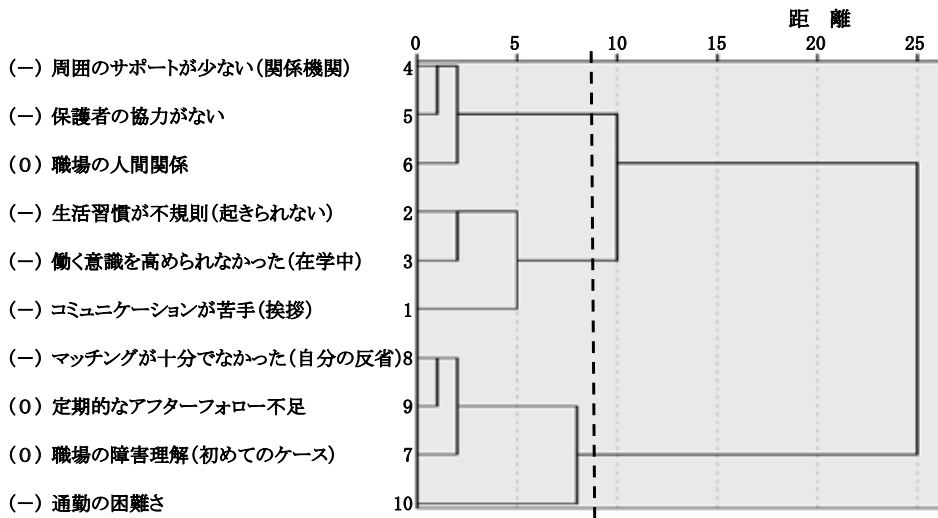


Figure 3 失敗事例のデンドログラム (被験者B)

注1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注2) 図中の縦断破線は、被験者Bによるクラスター切断距離の位置

注3) 各連想項目の前の ( ) 内の符号は単独でのイメージ

していることから、クラスターとしての重要順位は、クラスター2が最も重要で、次にクラスター1、クラスター3の順といえる。

<被験者Bによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈：抜粋>

クラスター1は「周囲のサポートが少ない (関係機関)」～「職場の人間関係」の3項目：本人の周辺関係というか…、そういうイメージでまとまっていると思う。

クラスター2は「生活習慣が不規則(起きられない)」～「コミュニケーションが苦手(挨拶)」の3項目：自分たちもやらなければいけなかったのかな、その見極めというのか、本人の課題というのか。働く基本というのか、就労した生徒だが、その力が弱かったのかな。

クラスター3は「マッチングが十分でなかった(自分の反省)」～「通勤の困難さ」の4項目：自分自身というのか…、自分自身の弱さというのか、自分自身の失敗というのか、もう少しこれをしておけばなというのはありますね。教師自身、教師自身の弱さ。自分自身の経験不足、その辺ができていたら、アフターフォローとかができていたら変わっていたのかな～という。今思えばですね。

クラスター1とクラスター2の比較：人間関係とかコミュニケーションとか、似ているところかな。働く上では、やはりコミュニケーションは大事なので。違うのは、本人の課題と周囲の課題。

クラスター1とクラスター3の比較：対象の生徒の周辺関係というところが似ている。周辺の協力というのか…、仕事への理解というのか…、障害者雇用の理解と言った方がいいかな。一つ

目のグループは、職場とか保護者とかであるが、三つ目の方は、教師自身の理解。

クラスター2とクラスター3の比較：生徒の課題と教師の課題、まあ同じ学校内、在学中の課題というのは同じ。働く意識というか、働き方というか…、何ていうのかな、生きる力とは違うけど…、働く力。生徒もまだ少なかったし、教師も教える手立てがまだまだ不足していた感じ。(Q：違うところは?) 本人側か、教師側かというところ。

全体について：失敗した理由は色々であるが、まとめてみると三つのグループそれぞれにアプローチの仕方はもっとあったのかなと思う。失敗はどの生徒にも同じようなことが起きているが、失敗から学べていない。まだ繰り返しているなど感じる。

補足質問：(Q：通勤の困難さも、指導の弱さみたいな教師自身の課題ということですか?) 通勤訓練しておけば良かった。バス通勤だったけど、乗り換えが難しかった。一便遅れるとパニックになって…。(Q：決まったバスでないと乗れない?) はい。(Q：一般就労していますよね? その時の交通手段は?) 最初は研修みたいな感じで、送ってくれる人がいて、何とかなっていたけど、そのうち自立しなければいけなくなると難しい。(Q：保護者の協力が無いというのは家庭に問題があった?) 色々ありすぎて、複雑な家庭環境で…。(Q：保護者支援が必要だったということ?) 支援ではなく、保護者トラブルが多すぎた。生活はちゃんとしているが、何かと色々と言う家庭だった。

#### <失敗事例についての総合的解釈>

クラスター1：このクラスターは、本人の周辺に関係する項目でまとまっている。「周囲のサポートがない(関係機関)」「保護者の協力が無い」「職場の人間関係」ということから支援体制が整っていなかったことが分かる。そこで、このクラスターは<支援体制>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター2：このクラスターは、本人の働くための基本課題といえる複数の要素からなる項目で構成されている。「生活習慣が不規則(起きられない)」は基本的な生活習慣に関することである。「働く意識を高められなかった(在学中)」は、クラスター間の比較での被験者Bの報告からもあるように働くイメージに関することである。「コミュニケーションが苦手(挨拶)」は社会性に関することである。そこで、このクラスターは<就労準備性に関する力>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター3：このクラスターは、本人ではなく、指導者である教師の課題に関する項目で構成されている。「職場の障害理解(初めてのケース)」と「通勤の困難さ」は職場や生徒本人の課題とも受け取れる項目であるが、被験者Bは教師側の支援不足という捉え方をしている。そこで、このクラスターは<教師の指導・支援の課題>のクラスターと捉えることができよう。

全体として：被験者Bによるクラスターの解釈、クラスター間の比較や全体のイメージの報告から、失敗した課題は誰にあるかという対象は三つ挙げられる。①生徒本人、②教師、③職場や関係機関、である。被験者Bは、教師自身の経験不足等から十分な指導・支援ができなかったこと、関係機関や保護者などの協力も十分ではなく、周囲の支援体制不足が就労を継続でき

なかった要因と捉えている。また、生徒自身の課題として、今までの生活の中で積み上げられているべき基本行動が確立されていなかったり、内面的なことであるが、働くことへの理解や働くイメージがもてていなかったりするなど働く上での就労準備性に関する力が培われていないことも就労を継続できなかった要因と捉えている。

(2) 成功事例

成功事例で連想されたのは10項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 4のようになった。

連想項目の単独イメージは、10項目中6項目がプラスイメージで、4項目がどちらともいえないゼロであった。このことから、全体としてのイメージは、プラスイメージと捉えることができる。

重要順位の高い順に4項目を挙げると、①本人の適性、マッチング、②本人に働く力、生きる力がある、③コミュニケーション力が高い (本人の能力)、④本人の資質 (明るさ、挨拶)、である。

クラスターとしての重要度は、クラスター2に属する4項目は重要順位1位から4位の項目であることから、クラスター1と比べてクラスター2の方が重要度は高いといえる。

<被験者Bによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈: 抜粋>

クラスター1は「周囲のサポート (ジョブコーチ支援)」～「職員のアフターフォロー (協力体制)」の6項目: 周囲のサポート力というか、周囲の協力体制。地道な支援というのか、一つ一つ重ねていって、というイメージ。

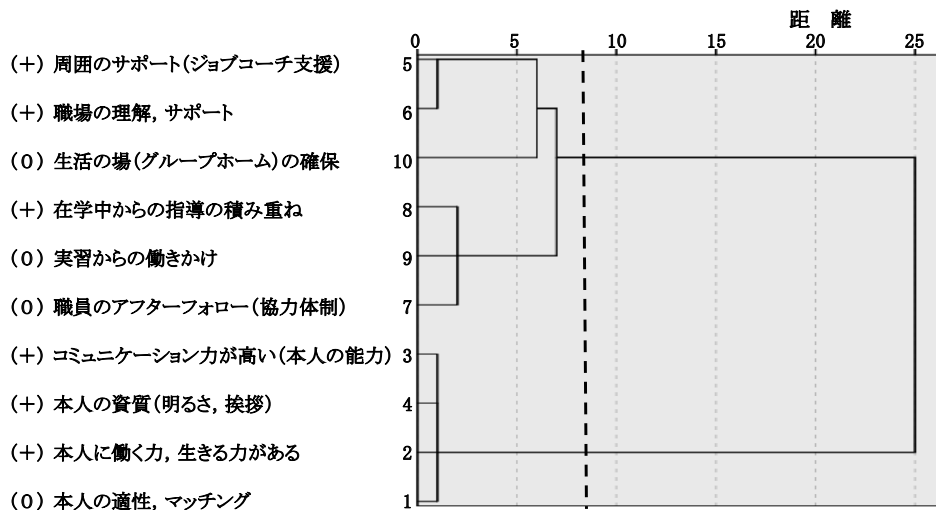


Figure 4 成功事例のデンドログラム (被験者B)

注1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注2) 図中の縦断破線は、被験者Bによるクラスター切断距離の位置

注3) 各連想項目の前の ( ) 内の符号は単独でのイメージ

クラスター2は「コミュニケーション力が高い(本人の能力)」～「本人の適性, マッチング」の4項目: 本人の仕事力, 働く力. 生きる力とまで言っているのか…, 強い子でした。

クラスター1とクラスター2の比較: 一つの目的に向かって取り組んでいた。就労という目的に周りも本人も向かって行けたような気がする。(Q: 違うところは?) 周囲か本人かというところ。

全体について: 頑張ったなという…, 就職に結びついたなという感じ。本人も周りもよく頑張ったなという感じ。やっぱり職場に理解があった。職場というか上司。実習先だったり, 働き先のサポートが良かった感じ。(Q: なぜ良かったと思いますか?) 店長の人柄だったり, 相手先がどうしても欲しいという感じだったりした。

補足質問: (Q: 本人に働く力, 生きる力があるとは?) 難しいですね…。就労・生活支援センターが出しているパンフレットに載ってあるやつ。(Q: 職業準備性のこと?) そう, それかなという気がする。職業準備性のピラミッドの上の方まで積み重なっている感じ。コミュニケーションという課題はあったが, うまくやれた。(Q: コミュニケーション力は高いけど課題はあったということ?) その時その時で問題点はでてきたが, その子もだが, 周りのフォローをうまく引き出せた。(Q: コミュニケーション力は問題なくということではなくて, 問題はあっても乗り越えることができるコミュニケーション力があつたということですか?) コミュニケーションにトラブルは付きもので, そのトラブルにも対応できる。普段は全然問題ないけど。(Q: あと本人の適性, マッチングというのは?) 仕事と…, 本人が合っていた。

#### <成功事例についての総合的解釈>

クラスター1: このクラスターの項目は, サポートや支援, 協力的体制などの言葉が多く含まれており, <支援体制>のクラスターと解釈できる。支援をするのは教師(学校)や職場, それ以外の関係機関である。

クラスター2: このクラスターは, 働くために必要な力といえる複数の要素からなる項目で構成されている。「コミュニケーション力が高い(本人の能力)」や「本人の資質(明るさ, 挨拶)」は社会性に関する力であり, 本人の資質に関わる部分が多い。「本人に働く力, 生きる力がある」について被験者Bは, 障害者福祉や職業リハビリテーションの分野でよく使われている「職業準備性」の職業準備性ピラミッドで高い位置の力まで積み重なっていたと報告している。「職業準備性」とは, 職種や障害の有無を問わずに働く上で必要とされる基礎的な能力のことであり, 働くための基礎的な力をもっていたということである。「本人の適性, マッチング」は職業適性といえることから, 職業準備性に含めることができる。これらのことから, このクラスターの全ての項目が職業準備性の要素と捉えることができることから<就労準備性に関係する力>のクラスターと捉えることができよう。

全体として: 本人と周囲に関係する二つのクラスターから構成されている。本人の社会で通用する基本的な力が身に付いていることと, 周囲の支援体制ができていたことが重要である。また, 本人と支援者が就労という同じ目標に向かっていったことが成功へと結びついている。就

職先のサポートが本人に合っていたことも成功の要因である。

### (3) 被験者Bについての考察

失敗事例のクラスター3<教師の指導・支援の課題>は、学校の支援体制ともいえる。重要順位から、成功事例、失敗事例に関わらず、生徒本人に関するクラスターの重要性が高いといえる。クラスター分割の特徴として、支援者側のグループが学校とそれ以外に分かれるのに対して、成功事例では一つにまとまっていることから、連携の程度が影響していると考えられる。

失敗事例と成功事例のクラスターを比べると、<支援体制>と<就労準備性に関係する力>が共通している。本人に基本的な生活習慣やソーシャルスキルなどの基本的な力が身に付いているか、また、支援体制を充実できるかが就労し、継続することを左右するといえよう。特に失敗事例では、<教師の指導・支援の課題>のクラスターが見られたことから、支援体制を充実したり、働くための基本的な力を身に付けさせたりするための指導・支援の在り方に苦慮していることがうかがえる。

## 3. 被験者Cの事例

被験者Cは、教職歴20年以上で特別支援学校高等部進路指導主任の経験がある女性教諭である。失敗事例は、被験者Cが15年目に担任した高等部3年の中度の知的障害のある男子生徒のケースである。高等部卒業後、一般就労をしたが半年ぐらいで退職し、その後障害福祉サービス事業の就労継続支援B型を利用している。他方、成功事例は、被験者Cが21年目に関わった高等部3年の軽度の知的障害のある女子生徒のケースである。高等部卒業後、一般就労をし、現在も継続している。また、就職してから普通自動車の免許を取得している。

### (1) 失敗事例

失敗事例で連想されたのは13項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 5のようになった。

連想項目の単独のイメージは、全ての項目がマイナスイメージあった。「働きたい気持ち・意欲」等、言葉だけではプラスイメージと捉えることができる項目でも、本事例においては「働きたい気持ち・意欲がない」という意味で用いているためプラスイメージの項目がなかった。このことから、全体のイメージはマイナスイメージであるといえよう。

重要順位の高い順に1/3までの4項目を挙げると、①働きたい気持ち・意欲、②働く力がまだ足りなかった、③基本的な生活習慣、④衛生面、である。1位から4位の項目全てが、自分自身で行動したり、自分自身の内面の問題だったりする内容である。

クラスターとしての重要度は、クラスター1には、重要順位の1位と2位の項目が含まれることから、最も重要なクラスターであるといえる。次に、クラスター4には属する2項目のうち重要順位3位の項目が含まれ、クラスター5には重要順位4位の項目のみで構成されていることから、どちらのクラスターも次に重要なクラスターといえよう。

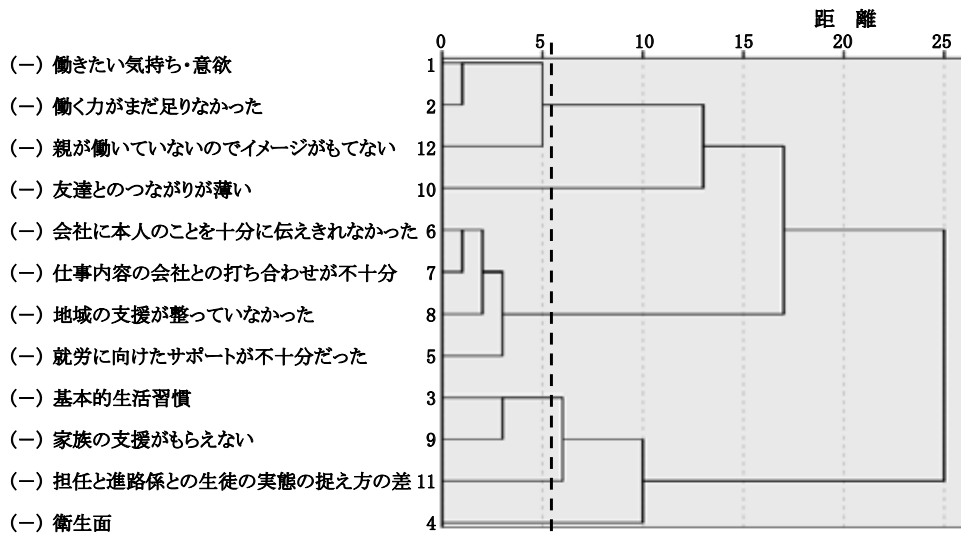


Figure 5 失敗事例のデンドログラム (被験者C)

注1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注2) 図中の縦断破線は、被験者Cによるクラスター切断距離の位置

注3) 各連想項目の前の ( ) 内の符号は単独でのイメージ

#### <被験者Cによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈：抜粋>

クラスター1は「働きたい気持ち・意欲」～「親が働いていないのでイメージがもてない」の3項目：イメージは、まあ、働くということに関してまとまっていると思う。働くイメージがあるかどうか、具体的に想像されているかどうか、そんな感じかなあ…。理由も一緒。

クラスター2は「友達とのつながりが薄い」の1項目：余暇の利用が…だから余暇の利用が充実しないので、仕事のオンとオフの切り替えがうまくいかなかったりとか、働くときに独りぼっち、一緒にいるわけではないけど、何て言えばいいのかな…、つながりは薄いから、相談ができないとか、人と比べて自分がどうというのが分からないから、ただ自分がきついという気持ちに陥ってしまうとか、つまらないと思ってしまうとか、そんな感じかな。

クラスター3は「会社の人に本人のことを十分に伝えきれなかった」～「就労に向けたサポートが不十分だった」の4項目：イメージは具体的支援で、これらがまとまったのは、え～と、本人が本人の力とか、得意とか不得意とか、そういうのを客観的に観る力は弱いので、それを自分で理解して会社に伝えるのは難しいので、それを周りが整える、働く環境を整える必要があると…、という意味で本人のことを伝えたり、仕事にしても細分化したりとか、この仕事はできると思うけど、こっちの仕事は難しいとか、そういうことを事前にしっかり打ち合わせができていないと違ったかなとか…、仕事を増やすときには必ず試してから増やしてくださいとか、一日のスケジュールをどうするとか、そういう具体的な打ち合わせがちゃんとできていなかったと思う。この頃は、まだ地域にジョブサポーターとかみたいな支援制度が



整ってなかったので学校と職業センターに行くことぐらいしかできなかったの、会社訪問の頻度が少なくなったりして問題解決のタイミングがうまくいかなかった。就労に向けた支援が難しく不十分になってしまったと思う。

クラスター4は「基本的な生活習慣」「家族の支援がもらえない」の2項目: イメージは本人がもっている生活力とか、自己コントロールとか、習慣…、習慣化…、習慣かな。まとまっているのは、基本的な生活習慣なので、朝起きるとか、身なりをきれいにするとかですが、家庭自体がそういうルールがない家庭だったので、身に付く環境ではなかった感じだし、親も働いていなかったの働くイメージがもてないままに、働く、頑張る意味が見いだせないというか、そんな感じだったな。

クラスター5は「担任と進路係との生徒の実態の捉え方の差」の1項目: 私は担任で、その子は元々一般就労の力があつたかといったら、微妙な感じだった。微妙だったけど、進路の先生が、本人が働きたいと言っている車関係の仕事を見つけてきてくれて、職場の人もすごく良い方たちで、実習してみたら結構受け入れ体制もいけるかな〜って感じがしたんですよね。どうかな〜、微妙だな〜と思いつつも挑戦してみてもよいのかなという感じで送り出したのですが、やっぱり基本的な力が身に付いていないままだったので、やっぱり予想通りと言ったら変ですが、色々問題が出てきた。だからその辺は、進路の先生はどうにかなるんじゃないかと、いけるのではないかというような判断はしてくださったんですけど、私がつもっていた微妙な不安感と言うのは最後まで拭えなかったけど、でもまあ、地域に知ってもらって理解者を増やして行って、働ける場を広げる意味では挑戦していかないといいというのも分かるので、一緒に挑戦していこうと思ったんだけど、その感が良かったのか悪かったのかはよく分からない…というそんな感じです。(Q: 生徒の実態の捉え方が進路係の方が高かったということですね?) まあ、そうですね…。実習評価だけみるとやれそうな感じがしていたんですけど、家庭環境とか日常生活を見たときに、ちょっと厳しい面があるのではないかなと、担任としては思っていた。車が好きというのだけでは、働くということとは、ちょっとまた違うかな。

クラスター6は「衛生面」の1項目: 衛生面は本当に身ぎれいにできてなくて、衛生基準的にもきれいという感覚がなかったので、そういう意味でも職場で…ちょっとこう…、社会的なマナーというか、普通作業をしたら着替えて帰るとか、汗をかいたらタオルで拭くとか、そういうところがまだ全然できていなかった。そういうところがやっぱり問題だったのかな。

クラスター1とクラスター2の比較: 似ているところは…う〜ん、違うところからでもいいですか?(Q: いいですよ) 違うのは、一つ目のグループは、自分のことだったり、身近な人のことだったりする。二つ目のグループは、他者という形になるので、その辺が線引きとして違うかなと思う。でも、同じところでは、人なので同じように自分が感じる意欲とか気持ちとか、そういうものも持っている、もっているものだということでは同じだと思う。その辺が薄かったの、他者を意識することができなかった。

クラスター1とクラスター3の比較: 似ているところは、仕事の上での課題と言うか、違う

ところは本人側からか、周りの側から仕事を見るのかという視点が違う。

クラスター1とクラスター4の比較:同じところは、本人にとって身近なもの。違うところは、本人の努力によって改善できることと、ちょっと元々与えられていなくて本人だけの問題だけではないということ…かな、でもどっちとも言える気はするけど。(Q:一つ目のグループが本人の努力で…)本人の努力というか、これからの未来のことなので、本人次第で変えていくことはできると思うけれど、基本的な生活習慣とか、家族の支援というのは、これまでに培ってきたものなので、本人の責任だけではないというか、環境の影響が大きいという気がする。

クラスター1とクラスター5の比較:同じところは、働くということについて考えているとか、というところは同じ。違うのは、五つ目は、周りが本人をどう捉えるかということ、一つ目は本人自身の気持ちとか、力になるので、その辺がちがうのかな。

クラスター1とクラスター6の比較:同じところは…、習慣化というところは同じかもしれない。違うところはやっぱり、生活上のことか働くことかというところが違うかな。

クラスター2とクラスター3の比較:二つ目と三つ目で同じところは…、何だろう…、本人を取り巻く環境というところでは同じかな。違うところは、同世代のつながりか、本人と支援者という関係か。

クラスター2とクラスター4の比較:二つ目と四つ目を比べたときは…、ない。同じも違うもない気がする。

クラスター2とクラスター5の比較:本人を取り巻く環境という点では友達も私たちも変わらないかなと思うけど…。違うのは…、二つ目の「友達とのつながりが薄い」と五つ目の「担任と進路係との生徒の実態の捉え方の差」の同じ点と違う点だから…、分からない。同じも違うも分からない。

クラスター2とクラスター6の比較:二つ目と六つ目も分からない、関係性はないと思う。

クラスター3とクラスター4の比較:三つ目と四つ目は、同じことはよく分からないけど、違うのは、会社へのアプローチと本人や家庭へのアプローチというところかな。

クラスター3とクラスター5の比較:三つ目と五つ目は、支援者という立場では一緒かな。違う点は学校と第三者との関係性というのと、学校内の関係性かな…。

クラスター3とクラスター6の比較:関係性はないと思う。

クラスター4とクラスター5の比較:違いは、四つ目は本人に関することで、五つ目は支援する側の課題というか。同じところは…、ないのかな。

クラスター4とクラスター6の比較:四つ目と六つ目は、衛生面とは基本的な生活習慣だと思う。違うところは書いてないというか…、同じですね。

クラスター5とクラスター6の比較:五つ目と六つ目は、本人の課題と支援する学校側の課題というところでは違う。同じはないかな。

全体について:働くためには、ある程度の基礎的な力が必要だなあ。働き続けるためには、サポート体制の充実が必要だな。本人の実態をどう捉えるかというのは難しいなあ。実態とい

うのは家庭環境も含めて。

補足質問: クラスター3 → (Q: 三つ目のグループは卒業した後のこと?) 前も後もだと思いうけど, まずは前に..., その会社に決める段階でまずはちゃんとやっていく, 後は問題が出たときに必ずすぐに対応する。

#### <失敗事例についての総合的解釈>

クラスター1: このクラスターは, 働くことに直接関係し, 働く行動に影響を及ぼす内容から構成されている。「働きたい気持ち・意欲」「親が働いていないのでイメージがもてない」は, 働くためのモチベーションに関わり, 「働く力がまだ足りなかった」は, 就労を継続するための必要な要因に関わる。「働きたい気持ち・意欲」は高ければ良いのだが, この事例の場合は低かった事例であることから, 働くためのモチベーションは低い結果となっている。働くイメージがあることが, 働くことへの意欲を高め, 学校生活の学習活動において, 働く力を身に付けるという成果を左右すると考えられる。そこで, このクラスターは<働くイメージ>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター2: このクラスターは, 「友達とのつながりが薄い」の1項目である。友達とのつながりが薄いことで, 休日に一緒に遊んだりして過ごす友達がいなかったり, 困ったときに相談する友達がなかったりするなど, 余暇が充実しない。また, 人とのつながりが薄いことで自分を他人と比べる機会が乏しいため, 客観的に自分を見つめることが難しくなる。そこで, このクラスターは<人とのつながり>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター3: このクラスターは, 「会社の人に本人のことを十分に伝えきれていなかった」「仕事内容の会社との打ち合わせが不十分」「地域の支援が整っていなかった」「就労に向けたサポートが不十分だった」の4項目からなり, 具体的支援に関わる項目から構成されている。障害のある人が自分から支援を求めることは必要なことであるが, このクラスターの項目は, 障害のある人からではなく, 周りが支援体制や働く環境を整えることの内容である。そこで, このクラスターは<支援体制>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター4: このクラスターは, 「基本的な生活習慣」「家族の支援がもらえない」の2項目からなり, これらは生活環境に起因するところが大きく, 本人がもっている生活力や自己コントロールできるかに左右されるものである。これらは, 生活する上での基盤になるものであることから, このクラスターは<生活基盤力>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター5: このクラスターは, 「担任と進路係との生徒の実態の捉え方の差」の1項目である。同じ生徒の進路先について考えている点では方向性は同じといえるが, 生徒の実態の捉え方や可能性の感じ方に差がある。担任は一般就労するための力は足りないのではないかと感じていたが, 進路係は大丈夫ではないかという判断をしたというところから, 担任と進路係との間での考え方や感じ方の差を埋めることが難しかったことを表しているといえる。そこで, このクラスターは<同僚性>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター6: このクラスターは, 「衛生面」の1項目で, 日頃から身ぎれいにできておらず,

また、きれいにした方が良いという感覚自体が備わっていなかった。身ぎれいにできていないだけなら基本的な生活習慣の問題といえるが、自分だけの問題ではなく、周囲の人の気持ちも考えた行動、いわゆる社会的なマナーができていない例である。そこで、このクラスターは「社会的マナー」のクラスターといえよう。

全体として：クラスター間の比較や全体のイメージの報告から、次のように考察できる。重要順位から、働くイメージをもち、基本的な生活習慣が身に付いていることが、より重要である。人とのつながりや関係性があることで、困ったときに相談することができたり、休み時間や休日と一緒に過ごすことができたりする。また、そうした人とのつながりや関わりの中で、他人を意識し、自分と他人を比較したり、他人のことを理解できたりするを経験することが、働くイメージを獲得することにつながるといえる。

就労し、それを継続するための課題は、本人に働くイメージがあり、働くことのできるかという本人自身の面と、地域や会社など支援をする側のサポート体制を充実させることができるかという本人以外の周囲や環境の面があるといえる。また、学校における支援の充実を図るためには、生徒理解について、家庭環境も含めて教師間で課題・悩み・目標を共有するなど協働的な関係（同僚性）が支援の充実につながるといえる。

就労し、それを継続するために必要な力は、働くことの基盤となる働くイメージの獲得など、未来に向けて本人の努力で変わる可能性があるものと、生活基盤となる基本的な生活習慣や社会的マナーなど、本人の努力だけでは難しく、育ってきた環境や習慣、家族の支援などの環境に左右されやすいものがあるといえる。

これらのことから、本人に対してはいかに働くイメージを獲得できるようにするかが支援の鍵となるといえよう。

## (2) 成功事例

成功事例で連想されたのは14項目で、重要順位、クラスター分析及び単独イメージの結果はFigure 6のようになった。

連想項目の単独のイメージは、重要順位14位の「お金の使い方」以外の13項目がプラスイメージであったことから、全体のイメージはプラスイメージであるといえる。

重要順位の高い順にはほぼ1/3までの5項目を挙げると、①就労意欲がある、②仕事が決まるまでの過程を大切にすること、③実習をして決める、④会社の理解がある、⑤社内で支援体制がある、である。重要順位1位の①就労意欲がある、は自分自身の内面の問題であるが、2位と3位は本人と支援者の関わりの中で行われるものであり、4位と5位は本人の環境や本人へのサポートに関するものである。これらのことから、成功への重要事項は複数の要素が関係していることが推察される。クラスターとしての重要度は、クラスターを構成する項目の重要順位から、クラスター4が最も高く、次にクラスター5, 2, 3, 1, 6の順といえる。

### <被験者Cによるクラスター、クラスター間の比較及び全体についての解釈：抜粋>

クラスター1は「フォロー体制をつくる」～「目標（次の）向上心」の4項目：イメージは、

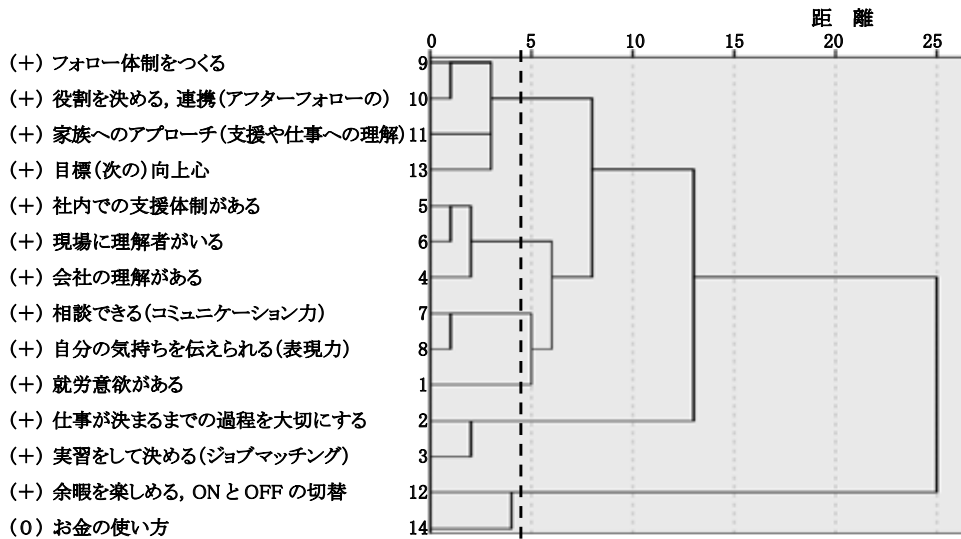


Figure 6 成功事例のデンドログラム (被験者C)

注 1) 連想項目の後ろの数値は重要順位

注 2) 図中の縦断破線は, 被験者Cによるクラスター切断距離の位置

注 3) 各連想項目の前の ( ) 内の符号は単独でのイメージ

支援体制の確立かな。まとまっているのは, どういう風な就労後の継続のための支援体制を整えていこうというときの役割とか, アプローチ先とか, そういうところでのまとまりではないかなと思う。

クラスター 2 は「社内での支援体制がある」～「会社の理解がある」の 3 項目: 雰囲気の良い会社, まとまっているのは働く場での理解。

クラスター 3 は「相談できる (コミュニケーション力)」「自分の気持ちを伝えられる (表現力)」の 2 項目: イメージとしては, まあ…, 相談, 仲間とか。まとまっているのは, 相談ができるためには正直に話すとか, 伝えるとか, 信頼関係。

クラスター 4 は「就労意欲がある」の 1 項目: 働くイメージ。就労意欲なので…。

クラスター 5 は「仕事が決まるまでの過程を大切にする」「実習をして決める (ジョブマッチング)」の 2 項目: イメージは…, 仕事とか, 職業の種類とか。まとまっているのは, とにかく仕事を決めるには, 実際に体験して決めないといけないから, そういう仕事を決めるまでの過程という意味で一緒かな。

クラスター 6 は「余暇を楽しめる, ON と OFF の切替」「お金の使い方」の 2 項目: これは, 余暇利用。私生活の充実というか, リフレッシュとか。

クラスター 1 とクラスター 2 の比較: これは, 支援体制という意味では同じだと思います。違うのは, 二つ目は職場内のことだけど, 一つ目は本人を取り巻く周りの環境…。

クラスター 1 とクラスター 3 の比較: 同じところは, 本人の気持ちを聞くとか, 本人の気持

ちを大事にするとか…、そういうところは同じかなと思う。違うのは、三つ目のグループは本人に直接働きかけることだけど、一つ目のグループはそれだけではないかな。会社との関係とか家庭との関係とか、そういう形になる部分があるので。

クラスター1とクラスター4の比較:同じところは、働き続けるために必要なことという点では同じだと思う。違うのは、一つ目のグループは本人を取り巻く環境、四つ目のグループは本人自身。

クラスター1とクラスター5の比較:同じところは、本人へのアプローチという意味では同じだと思う。違うところは、一つ目のグループは就職した後でもずっと続いていくけど、五つ目のグループはどちらかという就職するまでに大事にしなければいけないことかな。

クラスター1とクラスター6の比較:同じところは、ないような気がするけど…。(Q:違うところは?)六つ目のグループは本人がすることで本人自身のことだけど、一つ目のグループは周りの人たちがすること。

クラスター2とクラスター3の比較:二つ目と三つ目は、本人をサポートするという点では同じ。でも二つ目のグループは職場、本人を取り巻く環境であって、三つ目は本人自身の行動だったりする。

クラスター2とクラスター4の比較:働くために必要なものとしては同じだと思う。二つ目のグループは周りがすることだけど、四つ目のグループは本人自身の問題。

クラスター2とクラスター5の比較:同じところは、働く、仕事、就職ということに関して、関係があるという点では同じだと思う。二つ目のグループは就職する前から続くことだけど、五つ目のグループは仕事が決まるまでのことかな。

クラスター2とクラスター6の比較:同じところはない気がする。違うのは仕事と余暇というところが違う。あと、六つ目のグループは本人のことだけど、二つ目は周りの人で働く環境というところかな。

クラスター3とクラスター4の比較:同じところは、本人の気持ちというか本人自身のものだという事は同じだと思う。三つ目のグループは相手がいてすることだけど、四つ目は本人自身の中に芽生えているものというか、コミュニケーションを取る、このことは直接的にコミュニケーションとつながることではないかもしれないな。

クラスター3とクラスター5の比較:三つ目は自分自身のことだけど、五つ目は自分のことではあるのだが、気持ちというよりかは過程というか、決まるまでの過程というところが違う。同じところでは、意思表示というか表明するところが大事というところでは同じかな。

クラスター3とクラスター6の比較:本人がするということでは同じかな。でも違うのは、三つ目のグループは内面的なことが大きく影響すると思うけど、六つ目のグループは行動というところになるかな。

クラスター4とクラスター5の比較:そうですね～、仕事ということに関しては同じですけど、四つ目はずっと続いていくことというか、増えたり減ったりしながら続いていくことだけ

ど、五つ目のグループは決めるというか、決まった時点でそのことに関しては終わるというか、そういうところは違うかな。

クラスター4とクラスター6の比較: 本人のことという意味では同じですけど、違うところは仕事に関することと、余暇に関することという意味では違う。でも関わりはあると思う。(Q: 関わりがあるとは?) お金があったら就労意欲にもつながるし…、関係性はあるということ。同じということではないけど。

クラスター5とクラスター6の比較: 働くということに関わることではあるけれども、五つ目のグループは仕事が決まるまでの過程で、六つ目のグループは働きはじめてから必要。それまでも必要なんだけど、特にオンとオフを考えると、働くということが始まってからのことになるのかな。

全体について: ステップを踏んで、しっかりと進めていくことが大事、それからサポート体制はしっかりと整えていく、それは会社内もだし、会社とか本人を取り巻く環境もそうだし。やっぱり本人自身の中で相談するとかいうことはとても大事。あと楽しみもないといけない。

補足質問: 「余暇を楽しめる」→ (Q: 「余暇を楽しめる」とは、在学中から休みの日の過ごし方が上手だったということ?) そうですね…、友達と遊ぶ、外に出かけるということができていた。約束して待ち合わせして出かけるとか、歌が好きとか、カラオケが好きとか、そうして一緒に遊ぶ友達がいた。「お金の使い方」→ (Q: 「お金の使い方」とはどういうことですか?) ある程度計算ができるとか、失敗して無駄遣いしても、それを覚えていて次に生かすことができていた。「就労意欲がある」→ (Q: 「就労意欲がある」というのは?) したいこと、車の免許を取りたいとか、そういうのもあったりして、給料を貰って働きたい、仕事内容でもっとこの仕事できるようになりたい、夜勤をできるようになりたい、とかそういう意欲のある生徒だった。(Q: そういうことを表現できる生徒だったということ?) そうですね、周りの人にも夜勤ができるようになりたいので仕事を覚えたいですというのを言っていた。だから周りの人もできるように頑張ろうという感じだった。

#### <成功事例についての総合的解釈>

クラスター1: このクラスターは、高等部を卒業し就職した後の支援体制の充実に関する項目でまとまっており、学校や家族など職場以外の本人を取り巻く環境が対象になっている。そこで、このクラスターは<職場以外における支援体制>のクラスターと解釈することができよう。

クラスター2: このクラスターは、職場内での支援体制や会社の理解、理解者の存在が挙げられている。会社に理解者がいなければ支援体制が整うことは難しいことから、<職場における障害者の理解と支援体制>のクラスターといえよう。

クラスター3: このクラスターは、相談したり、自分の気持ちを伝えたりするためのコミュニケーション力で構成されている。また、相談したり気持ちを伝えたりするには、相手との信頼関係が必要となる。そこで、このクラスターは<コミュニケーション力と信頼関係>のクラ

スターと名付けることができよう。

クラスター4:このクラスターは、被験者が働くために必要と考えている「就労意欲がある」の1項目である。車の免許を取得したいなど本人がしたいことがあることで、給料をもらって働きたいと思ったり、もっと多くの仕事内容ができるようになりたいと思ったりすることなど、働く目的を本人がもつことで仕事に対する向上心が高まる。働くことの理解と働くことによる生活のイメージもできていた。そこで、このクラスターは<働くことの理解と働くイメージ>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター5:このクラスターは、実際に仕事を体験して就職先を決めるという、就職先を決めるための本人への支援のアプローチについての項目で構成されている。そこで、このクラスターは<進路決定への支援>のクラスターと名付けることができよう。

クラスター6:このクラスターは、仕事が休みの日の余暇の過ごし方やお金の使い方という職場以外での生活に関する項目で構成されている。そこで、このクラスターは<私生活の充実>のクラスターと名付けることができよう。

全体として:六つのクラスターのうちクラスター1, 2, 5は支援体制に関することである。また、クラスター間の比較と全体イメージの報告から、特別支援学校の知的障害のある生徒が、高等部卒業後就労し継続するための指導・支援の鍵となる観点としては支援の対象であるといえる。本人への直接的な指導・支援と本人を取り巻く環境に対する支援体制の充実という二つの面が必要である。本人への直接的な指導・支援で重要な内容は、自分の気持ちを伝えたり信頼関係を築いたりするためのコミュニケーション力の向上や働くことを理解し、働くイメージの獲得などである。また、支援体制を充実するためには、職場はもちろん、学校や家庭などの職場以外の支援体制の充実が重要である。そのためには、障害者が働くことへの理解を深める必要がある。本人への指導・支援は主に在学中となるが、在学中だけの指導・支援だけでなく、卒業後働きだしてから必要となるサポート体制充実への支援も重要である。また、生活していく上で、仕事と余暇の両方が大切である。働いて得た収入で、計画的に購買や貯蓄を行うことが、余暇を楽しく過ごし私生活が充実することになり、私生活を充実させるために収入を得ようとまた就労意欲につながる。就労し、それを続けるためには私生活の充実が必要である。

### (3) 被験者Cについての考察

被験者Cの失敗事例と成功事例を併せて考察すると、支援体制と働くイメージに関するクラスターが共通している。また、失敗事例での<人とつながり>、成功事例での<コミュニケーションと信頼関係>のクラスターも他人と関わっていくことから共通しているといえよう。失敗事例で特徴的なクラスターは、生徒本人に関することとして<生活基盤力><社会的マナー>、支援者側の問題である<同僚性>である。成功事例で特徴的なクラスターは、<私生活の充実><進路決定への支援>である。



### 全体的考察

本研究では、教職歴の異なる3人の特別支援学校教諭を対象に、「一般就労し、それを継続するのに必要とされる力についての指導・支援を行った中で、最もうまくいかなかったケース(失敗事例)と最もうまくいったケース(成功事例)」について連想を求めた。キャリアを積み重ねることで、指導・支援の観点がどのように変容するのかを考察する。

連想項目の数は、失敗事例が最小10から最大13であり、成功事例が最小10から最大14であったことから被験者内と被験者間でほぼ同数とみなせる数であったが、失敗事例の方がやや多い傾向がある。これは、失敗事例の場合、成功事例と比べて、反省をしたり、振り返ったりする機会が多いことが推察され、連想を促すことが考えられる。

各連想項目の単独でのイメージで、失敗事例と成功事例に共通していることは、失敗事例の連想項目は、ほぼ全てがマイナスイメージであり、成功事例の連想項目は、ほぼ全てがプラスイメージということである。このことから、指導・支援がうまくいっていないときは、生徒のマイナス面のことに注意が向いたり、印象として残りやすかったりする傾向があると考えられる。一方、うまくいっているときは、生徒のプラスの面に気が付きやすかったり、良いことばかりが印象として残りやすかったりする傾向があると考えられる。これらのことから、失敗事例と成功事例における個人内のイメージ構造は明確に異なるものであり、本研究の目的に沿う内容的に妥当な連想項目が得られたといえる。

次に、それぞれの被験者の失敗事例と成功事例のクラスターの内容の同異を検討した。クラスターごとに、クラスターの内容で、〈同僚性〉や〈教師の指導・支援の課題〉のクラスターを「学校による支援(以下、支援(学校))」としたり、〈支援体制〉のクラスターは、支援する側の立場で「学校による支援」「職場による支援(以下、支援(職場))」「関係機関による支援(以下、支援(関係機関))」というように分けたりして分類した。その結果、[働くイメージ][基本的生活習慣][社会性][支援(学校)][支援(家庭)][支援(職場)][支援(関係機関)][私生活の充実]に整理・分類することができた。その結果をTable 1に示し、被験者内での比較と被験者間の比較から考察をする。

**被験者内の比較** 被験者Aは、失敗事例と成功事例の両方とも、クラスターの内容が[働くイメージ][社会性][支援(学校)][支援(家庭)]と同じであり、それらの内容がうまくいったかどうか鍵となっている。被験者BとCの失敗事例では、[働くイメージ][基本的生活習慣][社会性][支援(学校)][支援(家庭)][支援(職場)][支援(関係機関)]の内容が見られ、成功事例では、失敗事例と比べると[基本的生活習慣][支援(家庭)]の内容が見られない。また、被験者Cの成功事例では[私生活の充実]の内容が見られるのが特徴的である。基本的生活習慣は、学校での指導・支援の対象ではあるが、家庭教育での成果が大きく関係するものであり、家庭の協力や家庭での支援体制がなければ身に付くことが難しい。これらのことから、失敗事例では、基本的生活習慣や家庭の支援に力を入れており、その獲得に課題を抱えたままであったこと、一方、成功事例では、基本的生活習慣については、一般就労するのに

Table 1 被験者間のクラスター比較

	被験者A クラスター名 【分類名】	被験者B クラスター名 【分類名】	被験者C クラスター名 【分類名】
失敗事例	クラスター1 ①働くことの理解と働くイメージ 【働くイメージ】	②支援体制 【支援(家庭)(職場)(関係機関)】	①働くイメージ 【働くイメージ】
	クラスター2 ②生活理解と家庭との連携 【支援(家庭)】	①就労準備性に関係する力 【働くイメージ】【基本的な生活習慣】【社会性】	⑤人とのつながり 【社会性】
	クラスター3 ③自己理解と人間関係の形成 【社会性】	③教師の指導・支援の観念 【支援(学校)】	④支援体制 【支援(学校)(職場)(関係機関)】
	クラスター4 ④同僚生 【支援(学校)】	—	②生活基盤力 【基本的な生活習慣】【支援(家庭)】
	クラスター5 —	—	⑥同僚性 【支援(学校)】
	クラスター6 —	—	⑧社会的マナー 【基本的な生活習慣】
成功事例	クラスター1 ①人間関係の形成と学校での支援 【社会性】【支援(学校)】	②支援体制 【支援(学校)(職場)(関係機関)】	⑥職場以外における支援体制 【支援(関係機関)】
	クラスター2 ②働くことのイメージと家庭との連携 【働くイメージ】【支援(家庭)】	①就労準備性に関係する力 【働くイメージ】【社会性】	⑧職場における障害者の理解と支援体制 【支援(職場)】
	クラスター3 —	—	④コミュニケーション力と信頼関係 【社会性】
	クラスター4 —	—	①働くことの理解と働くイメージ 【働くイメージ】
	クラスター5 —	—	②進路決定への支援 【支援(学校)】
	クラスター6 —	—	⑥私生活の充実 【私生活の充実】

注1) クラスター名の前の○で囲まれた数字は、クラスターの重要順位

注2) 【支援(学校)】は学校による支援、【支援(家庭)】は家庭による支援、【支援(関係機関)】は関係機関による支援、の意味

注3) 【支援(家庭)(職場)(関係機関)】は【支援(家庭)】と【支援(職場)】と【支援(関係機関)】を、【支援(学校)(職場)(関係機関)】は【支援(学校)】と【支援(職場)】と【支援(関係機関)】を併せて表したもの

支障がない程度まで既に身に付いている生徒で、それに関連する特別な指導・支援を行う必要はなかったことがイメージ構造化で確認できる。

**被験者間の比較** 失敗事例と成功事例の両事例で、3人の被験者間で共通していることは、生徒本人が【働くイメージ】をもっていて、【社会性】があること、また、支援体制としては、【学校による支援】が重要であると捉えていることである。特に、【働くイメージ】の内容を含むクラスターは、被験者Aの成功事例以外は最も重要なクラスターの位置付けとなっている。

被験者間で異なっている点は、失敗事例と成功事例の両事例において、被験者Aは、連想項目の内容の範囲が、生徒、学校及び家庭の範囲内であるのに対して、被験者BとCは、職場や関係機関にまで広がっている。また、失敗事例では、【基本的な生活習慣】の内容が、被験者Aでは認められなかったが、被験者BとCで認められている。成功事例では、【基本的な生活習慣】の内容は全ての被験者で認められなかったが、被験者Cだけ【私生活】の内容の＜私生活の充実＞のクラスターが見られた。

3人の被験者は、それぞれ教職歴や進路指導のキャリアが異なる。被験者A、B、Cの順で特別支援学校教師としてのキャリアは長くなり、被験者BとCは特別支援学校高等部進路指導主任の経験もある。これらのことから、キャリアが重なる（教職歴が長くなり、教職の深まりが増すこと）につれて指導・支援の観点は、生徒、学校及び家庭の範囲から更に広範囲に広がっていくといえよう（Figure 7）。また、【働くイメージ】【基本的な生活習慣】【社会性】に関することは、生徒の資質的なものに関わるものであり、特に【基本的な生活習慣】と【社会性】は、高等部に入学する以前の指導・支援も重要である。高等部では、就労を継続することを視野に入れた支援体制の充実が必要であり、一般就労を目指す生徒一人一人にとって必要な支援者を想定した支援体制づくりが鍵となるといえよう。

紳・今林（2017）は一般就労を目指す知的障害者が必要とする力について、①日常生活を送

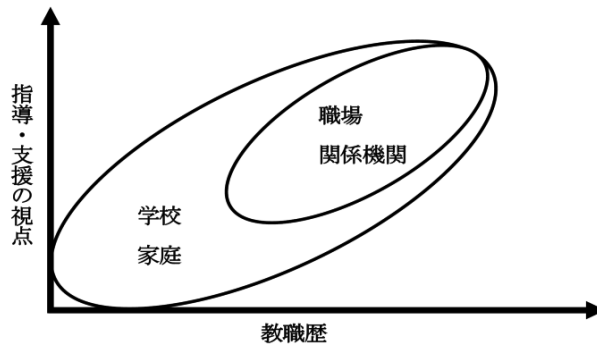


Figure 7 教師の指導・支援における視点の拡がりのイメージ

る上で必要な基盤となる「健康管理や基本的な生活習慣」(生活基盤力), ②社会性の発達を促進し生活意欲や働く意欲を支える基盤となる「自己効力感, ソーシャルスキル, レジリエンス」(社会性発達の三要素), ③一般就労の機会や就労継続の可能性を広げるための「職業適性, 専門的な知識・技能」(就労継続力)の三つの枠組みで捉えている。そこで三つの枠組みと, 本研究で得られたクラスターの中身の分類である[働くイメージ][基本的な生活習慣][社会性][支援(学校)][支援(家庭)][支援(職場)][支援(関係機関)][私生活の充実]との関係性を検討した。[基本的な生活習慣]は「生活基盤力」, [社会性]は「社会性発達」に相当し, [働くイメージ][支援(学校)][支援(家庭)][支援(職場)][支援(関係機関)]は, 一般就労の機会や就労継続の可能性を広げるためのものであることから, 「就労継続力」に相当するといえる。榎・今林(2017)が想定していた就労継続力の内容は「職業適性, 専門的な知識・技能」であった。本研究での3人の被験者の連想された項目やクラスターについての解釈からは, 直接的に「職業適性, 専門的な知識・技能」という言葉は現れていないが, 被験者Aの成功事例の「実習での成功体験」, 被験者Bの失敗事例の「マッチングが十分でなかった(自分の反省)」と成功事例の「本人の適性, マッチング」, 被験者Cの失敗事例の「仕事内容の会社との打ち合わせが不十分」と成功事例の「実習をして決める(ジョブマッチングが)」が内容的に該当するといえる。これらのことから, 就労継続力育成で重視すべき内容としては, 「職業適性」「専門的な知識・技能」に[働くイメージ][支援体制]を加えることができ, 働くことへの理解や働くイメージが獲得されていることが, 働き続けることに必要な知識・技能を身に付けることにつながることを考慮すれば, 「職業適性, 専門的な知識・技能, 働くイメージ, 支援体制」と捉えることが妥当であるといえよう。一方, [私生活の充実]については, 休日などの余暇の過ごし方を身に付けるという程度であれば, 基本的な生活習慣のレベルで「生活基盤力」に相当すると考えられる。余暇の過ごし方は, 障害の有無に関わらず幼少期の頃は家庭や学校など周囲の影響が大きい。しかし, 年齢を重ねるうちに, 自分の興味・関心に基づく余暇の過ごし方の決定が可能となり, 自分らしい生活を構築することができるようになり, [私生活の充実]へとつながっていく。[私生活の充実]は, 被験者Cの事例で前述のとおり, 仕事と余暇

は生活していく上で両方とも大切である。つまり、働いて得た収入で、計画的に購買や貯蓄を行うことが、余暇を楽しく過ごし私生活が充実することにつながる。また、私生活を充実させるために収入を得ようと就労意欲につながるという循環性を考慮すれば、社会性発達や就労継続力とも関係性があると捉えることができる。生徒の将来の社会的な自立を目指し指導・支援することを考慮する際に、「私生活の充実」という視点は、もっと重視される必要があろう。

### 引用文献

- 向後礼子(2014). 発達障がいのある人の学校から就労への移行支援並びに就労後の職場適応支援の課題 日本労働研究雑誌, 56 (5), 76-84. (<http://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2014/05/pdf/076-084.pdf> 2016年9月2日)
- 厚生労働省 (2014). 平成25年度障害者雇用実態調査結果, 13. (<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11704000-Shokugyouanteikyokukoureishougaiyououtaisakubushougaisakoyoutaisakuka/gaiyou.pdf> 2016年9月5日)
- 文部科学省 (2017). 特別支援教育資料 (平成28年度) ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1386910.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1386910.htm) 2017年7月5日)
- 村野一臣 (2016). これからの進路支援に求められるもの 特別支援教育研究, 707, 2-6.
- 内藤哲雄 (2002). PAC分析実施法入門 [改訂版]: 「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 榊慶太郎・今林俊一 (2017). 特別支援学校におけるキャリア発達支援の研究 (2): 社会性発達を促す観点から 日本教育心理学会第59回総会発表論文集, 496.
- 田所明房 (2016). 一般就労をめざす進路支援 特別支援教育研究, 707, 7-11.
- 上岡一世 (2013). キャリア教育を取り入れた特別支援教育の授業づくり 明治図書

### 付記

本研究のPAC分析の実施にあたり、特別支援学校に勤務する3人の先生方に御協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

また、本研究の結果の一部は、九州心理学会第78回大会 (於: 佐賀大学) において発表された。